

日本医療検査科学会 科学技術委員会
2021 年度第 2 回委員会議事録

1. 日時：2021 年 10 月 9 日（土）10:35～12:00
2. 場所：パシフィコ横浜会議センター 511+512 号室
3. 現地出席者（敬称略）：藤本、大久保、澤部、白井、三村、神山、清宮、田中、篠原、柏木、御子柴、金沢、青柳、山口、汐谷、末吉、角田、大澤
オンライン出席者（敬称略）：山本慶、外園、沼田、山本裕、菊地、山下、山内、緒方、春田、岡田、新井、姫野、黄江、三宅、桑
欠席者（敬称略）：高崎、和田、関田、川崎、藤田、山舘、片岡

4. 配布資料：

- 資料 1：2021 年度科学技術委員会委員名簿
- 資料 2：2021 年度第一回科学技術委員会議事録
- 資料 3：第 22 回科学技術セミナー講演要旨
- 資料 4：第 22 回科学技術セミナースライド（藤本先生）
- 資料 5：第 20 集マニュアル執筆者一覧
- 資料 6：第 20 集マニュアル執筆に関する留意事項
- 資料 7：今後の技術マニュアルテーマについて

5. 議事：

（1）2021 年度科学技術委員会委員について（資料 1）

今回の会議から新規委員として 4 名の先生方に参加していただくこととなり、角田先生（富士フィルム和光純薬）、姫野先生（ファルコバイオシステムズ総合研究所）、黄江先生（川崎医科大学総合医療センター）、三宅先生（岡山大学病院）から挨拶があった。また、現在アドバイザーとして参加いただいている山舘先生より、今年度をもって委員を退任したい旨の申し出があったことが報告された。

委員会名簿に記載されている FAX 番号について、現在使用する機会がほとんどないため名簿欄から削除したいとの提案が事務局からあり、承認された。

（2）池田先生および細萱先生の追悼文について

今年 4 月に池田先生、7 月に細萱先生が逝去された。両先生は科学技術委員会の発展において多大な貢献をされたことから、今年度発刊する科学技術マニュアルに追悼文を掲載してはどうか、との提案があった。技術マニュアルの性格を考えると、冒頭の挨拶

文あるいは編集後記に掲載するのが適当であり、科学技術委員会発足の歴史的経緯なども含めて編集後記として記載することとなった。

(3) 第1回科学技術委員会議事録について (資料2)

4月17日に沖縄の春季セミナー会場で開催予定であった第1回会議は、コロナ禍のためオンライン形式へと変更されて実施された。議事録案はすでにメール配信されており、資料の通り承認された。

(4) 第22回科学技術セミナーについて (資料3, 4)

明日(10月10日)の午後に第22回科学技術セミナーが開催される。藤本先生、久保先生が司会、5名の講師(藤本先生、黄江先生、関田先生、和田先生、清宮先生)が講演予定であり、各先生方の発表の概要について説明があった。また、黄江先生、関田先生は会場での講演ではなく、予め録画したパワーポイントの動画を映写する方式となる。今回のセミナーは、講演内容を録画・録音して、学会終了後にオンデマンドにおいても配信予定となっている。

セミナーの冒頭においても池田先生と細萱先生の追悼を実施しては、との意見があったが、オンデマンド用の録画に含まれてしまう可能性があるため、現地スタッフと打ち合わせを実施して対応することになった。

今年から事前の受講予約は実施せず、通常の講演会と同様の対応となる。このため、受付作業は必要なくなるが、アンケート用紙の配布は従来と同様に実施したいと考えている。

(5) 第20集マニュアルについて (資料5, 6)

次号第20集マニュアルは、「謎解き臨床化学検査 ～分かりにくい言葉・あやふやな事を明確に!～」のテーマで刊行されることが決まっており、執筆者も既に決定済みである。テーマのインパクトが高いことからMTJ(メディカルテストジャーナル)からも取材依頼があり、まもなく内容紹介が掲載される予定である。スケジュール的には8~11月が原稿執筆、11~12月で原稿チェックの実施、1月に著者校正、2月に発刊予定となっている。ページ数は120ページ程度を見込んでいる。著者の先生方にはよろしくお願いしたい。

(6) 第21集マニュアルの企画について (資料7)

第21集マニュアルテーマの候補として、桑先生より提案のあった「治療薬物による検査値への影響」と大澤先生より提案された「生化学自動分析装置を用いた検査法開発への基礎と応用」について検討した。議論の結果、「治療薬物による検査値への影響」

を次期テーマとすることに決定した。また、以下の通りの意見が挙げた。各委員がどの程度の症例を持っているか不明であるので、アンケート調査を実施することとした。

- ・薬物の検査値への影響には、薬理的に本当に検査値が変化する場合と、薬剤が反応過程に影響して本来のデータと異なる値が得られる場合とがあるので、区別すべき
- ・薬物の影響を全て網羅することは不可能なので、発生頻度が高いもの、検査値への影響が大きいものを扱う方がよい
- ・実際に薬剤の影響を経験することはそれほど多くないため、文献的な検索も必要になると思われる
- ・事例がどの程度集まるかが危惧される。少ないようであれば反応機序、メカニズムについての説明も含めるのがよい
- ・試薬メーカーはある程度の症例を持っていると思われるが、外部に出せない場合も多い。また、薬剤を検体に加えてデータを取ることは可能であるが、人体に投与した場合は代謝等で反応が異なってしまうことがある
- ・薬剤による誤反応だけでなく、その薬剤を使用することで及ぼす影響全てを含めてはどうか

(7) 次回の委員会について

次年度の春期セミナーは 2022 年 4 月 17 日（日）の日程で佐賀で開催される。よって、2022 年度第 1 回委員会は 4 月 16 日（土）に実施予定である。

以上

(記録：澤部)